



文＝伊藤哲也
写真＝亀卦川 英樹

特

急列車が駅のホームに滑り込んだ。「彫刻のまち」として知られる旭川[※]で、改札口を出て最初に目に入るのが、「天秘」(安田^{だかん}侃)である。この大きなホワイトブロンズの作品は、駅内外の光を受けて静かに輝き、見る者の心



夜の旭川駅。街灯とのコンビネーションが魅力的だ。



◎ 第二〇回 旭川駅

を穏やかにしてくるようだ。

もう一点、「Le Lac (みずうみ)」(神田比呂子^{かんだひろこ})も見逃せない。やや俯いて立つブロンズ像は、憂愁を湛えているように思われ、思春期の少女の内面を想像させる。「ステーションギャラリー」(中原二郎記念旭川市彫刻美術館の分館)は、この像のすぐそばにある。

「Le Lac (みずうみ)」は、東口へ向かう通路にある。作品名は、透明でありながら、時に波立つ少女の心情を象徴しているのだろうか。



「天秘」は旭川駅構内の南口(西側)近くにある。昨年はこの作品の前でコンサートも開催された。



※旭川の街中や公園には、約100基の彫刻がある。

砂澤ビッキの木彫作品をはじめ、旭川と北海道にゆかりのある彫刻家の作品などが展示されている。入館無料で、気軽に入れるのもうれしい。

今夜の宿は、駅に直結するJ R イン旭川。ビルの五階がフロントになっており、一階から四階はイオンモールなので、ビジネス、観光、ショッピングなど、すべてに便利だ。選べる枕、高級マットレスのベッドなど、「全ては心地よい目覚めのために」というコンセプトのもと、心地よいステイが楽しめる。枕コーナーは好評で、数に限りがあるため、気になる人は早めに選ぶのがいい。



1.5階のラウンジ。晴れていれば、窓の向こうに大雪山系の山々が見える。2.木の温もりも感じられる大浴場。温泉ではないが、リラックスできる。3.客室はシンプルモダン。写真はラージツインルーム。シングル、ツインなど5タイプ、198室ある。

●JRイン旭川／旭川市宮下通7丁目2-5 ☎0166・24・8888。チェックイン15:00、チェックアウト10:00、1泊朝食付2名1室ひとり6,000円～。イオンモール内にホテル専用エレベーターがある。



五階の大浴場で、ガラス越しに青空を眺めながら体を伸ばした。半露天風呂もあり、気分爽快。旅の疲れなど、たちまちに吹き飛んだ。ラウンジで雑誌を読むのも、いくつろぎタイムである。

夕 闇が迫る頃、紅灯の巷に出て、「魚自慢串あげ太郎」のドアを開けた。今年で創業四十九年となる居酒屋で、その名の通り魚も串揚げも楽しめる。大将の會田紘史さん曰く「人気は造りの盛り合わせとキンキです」とのことと、

さつそくどちらにも注文。もちろん、串揚げの盛り合わせも忘れてはいない。

造りが実がいい。市場のほか、港から直送の魚を仕入れており、この日はウニ、ツブ、タコ、マグロ、ヒラメ、アワビの肝和え、シマアジ、ホタテの八種類。とりわけアワビは磯の香りと肝のkokが混然一体となつて、日本酒の最高のお供である。ウズラの卵やエビなどの串は、さつくり軽やかに揚がっている。そして歯舞産（羅臼漁港）の釣りんキンキの煮付け。醤油、酒、出汁の



造りの盛り合わせのネタは、その日の仕入れ状況によつて変わる（写真は2人前）。日本酒は旭川の隣町・東川町の三千樓。

シンプルなタレに、透明な脂が浮いている。舌の上でほろりと崩れ、とろける白身は、まさに絶品であった。「魚は正直」（紘史さん）とは、至言である。

翠朝、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館へ向かった。旭川市が創設した中原悌二郎賞の受賞者作品を含め、一九〇〇年代頃から現代までの彫刻家の作品が鑑賞できる。

中原悌二郎（二八八八—一九二二）



（左）頬が落ちるキンキの煮付け。残ったタレを白いご飯にかけて食べた。お店公認の食べ方である。（右）串揚げの盛り合わせはウズラ卵、エビ、ナス、サケ、ホタテ、豚肉の6種類（写真は2人前）。

●魚自慢 串あげ太郎／旭川市三条通6丁目右2号 ☎0166・25・3947。17:30～23:00（L.O.22:30）、日曜休（月曜が祝日の場合は休）。お任せの造り4,000円～（2人前）、釣りキンキの煮付け6,000円～、串あげ（6本）740円など。おまかせコース5,500円～（飲み物別）などのコースもある。細い小路に面しており、予め場所を確認しておくといい。

は釧路に生まれ、九歳から十四歳までを旭川で過ごした。学業優秀で北海道庁立札幌中学校（札幌南高校の前身）に入学するが、絵画の道を志して友人二人とともに東京へ出奔。明治から大正へ時代が移るなか、新聞配達などをしながら美術学校に通い、ロダンを知って彫刻に転じた。

極貧の中で刻苦勉強したが、体を壊して旭川に戻り、回復すると



1.「若きカフカス人」はニンツアというロシア人が途中でモデルを辞退したため、2週間余りという短期間での制作だった。2.2階の展示室中央にある佛二郎の12点。正面中央が「若きカフカス人」。率直で力強く、生命感にあふれる作品が多い。

●中原佛二郎記念旭川市彫刻美術館／旭川市春光5条7丁目 ☎0166-46-6277。9:00～17:00（入館16:30まで）、月曜・年末年始休館（月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館）、大人450円。ロダンの「ジャン・デール裸体習作」、荻原守衛の「坑夫」、石井鶴三「中原氏像」など、佛二郎に影響を与えた彫刻家の作品も見逃せない。



像の若者に惚れる者はいないか？この『若者』は未だ生きているぞ」と書き残したという。

「神に対するような信仰と謙遜（けんそん）を持つて自然の前に絶対に服従したいのです」とは、佛二郎の言葉。彼は自然の持つ生命力と神秘に迫り、表現しようとした求道者だった。彫刻のまち・旭川は、この情熱を引き継ぐ形で、生まれたのだった。①

（左）館内の階段。こうした意匠も優れており、建物は国の重要文化財に指定されている。（下）建物は、1902年築の旧旭川偕行社。旧陸軍第七師団の将校たちの社交場だった。



また東京へ。やがて作品が美術展で入賞するなどして大きく期待されたが、三十二歳で肺疾患のために世を去った。

白

己に厳しい完璧主義者で、満足できない作品は壊して

しまう。そのため現在残る彫刻は

ブロンズの十二点のみ。頭部の像が十点、女性像が二点で、すべてここに展示されている。なかでも傑作として知られているのが、三十三歳の時の作品「若きカフカス人」だ。「未完成のために、かえって簡潔な肉づけが端的に強い構築性を示す

ようになっていく。頭髮、額、口、顎、首は直線的な角ばった面による量感をもって、雄勁（ゆうけい）、重厚なリズムで統一され、異常な迫力をはらんでいる」（匠秀夫[※]）と評される。

この像を見た芥川龍之介は「誰かこの中原佛二郎氏のブロンズ



※匠秀夫（たくみ・ひでお）は日本近代美術史研究者で、元茨城県近代美術館館長。引用文は『生命の彫刻 中原佛二郎の生涯』（発行：旭川美術振興会）に寄稿した「中原佛二郎の芸術」より。